

2025年12月30日発行
日本比較文化学会関東支部

2025年度第2号のレター発行となります。本号では、2025年12月20日(土)に岐阜聖徳学園大学にて開催されました「第66回関東支部例会」での支部会員の発表要旨について掲載致します。

日本比較文化学会関東支部事務局長 長田 元

◆第66回 関東支部例会 ご報告◆

当日は10名の支部会員による研究発表が行われました。澤田敬人先生・日本比較文化学会会長にもご参加頂き、各発表において積極的な意見交換がなされ、大変有意義な合同例会となりました。

◆開会の挨拶: 関東支部 支部長 郭 潔蓉 (東京未来大学)

◆研究発表:

311 教室

移動する祝祭実践

—高度なモビリティを有する移民における〈ホーム〉と〈家族〉の再構築—

山本 貴之

(上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科
グローバル社会専攻博士後期課程)

高いモビリティを有する移民 (mobile migrants) にとって、「ホーム」や「家族」といった概念は固定的な空間や血縁的関係にとどまらず、実践を通じて再構築される可変的なプロセスである。本研究は、東京に居住する mobile migrants への参与観察およびインタビュー調査に基づき、祝祭儀礼が彼/彼女らにとっていかに「ホーム・メイキング」と「ファミリー・メイキング」の装置として機能するのかを分析する。

分析の結果、彼女/彼らは母国文化・ホスト社会・配偶者の文化要素等を選択的に組み合わせながら祝祭を再構築し、装飾・料理・音楽・贈与などの象徴的・感覚的実践を通じて居住空間を「ホーム化」していることが確認された。また祝祭は、血縁的家族のみならず友人・近隣住民・オンライン上の遠隔的コミュニティを「フェスティブ・キンシップ」として一時的に編成する契機ともなる点が示唆された。さらに、祝祭実践には郷愁・安心・感謝といった情動が循環し、移動性に伴う不安定性を補完する「情動インフラ」としての役割が認められた。

本発表では、祝祭儀礼を通じたホーム/ファミリーの構築プロセスを分析し、「移動性」と「定着性」が対立ではなく相補的に作用する社会文化的メカニズムとして捉える視座を提示する。

史料紹介：画家アレグザンダーによる 中国に関する未公開のスケッチとその概要

熊谷 摩耶（東北福祉大学）

英国は毛織物の販路拡大、カントン貿易の改善、外交使節の北京駐在などを目的に、1792年に清朝治下の中国に外交使節団の派遣を行った。それは、大使マカートニーを筆頭とした乗組員を除く総勢95名からなる大規模な使節団であった。その中には使節団派遣目的の一つでもあった、中国現地の文化風俗を記す任務を有した画家も含まれていた。

本発表では、団員であった画家ウィリアム・アレグザンダー（William Alexander, 1767-1816）が現地で記した未公刊のスケッチについての紹介を行う。このスケッチはアレグザンダーがのちに出版する『中国の風俗画』（1805）、『中国の衣装および風俗』（1814）に掲載されているだけではなく、実質の公式報告書となる副使ストーントンの著書、会計係のバローの著書などにも多く挿絵として使用され、広く流布した。西欧諸国ではそれまでイエズス会士による中国情報が主流であったが、マカートニー使節団による書籍は需要が高く、英国内外でも版を重ねた。中でもアレグザンダーの画は理想化された中国ではなく、記録画としての中国情報が注目を集め、出版後もその画の転用がなされていたことが指摘されている。しかし、スケッチ本に描かれている絵を確認すると、公刊済みの書と異なる点が多く散見される。スケッチに描かれている画と出版された画との違い、そして選出されなかつた画にはアレグザンダーにどのような意図が反映されていたのであろうか。

この未公刊の史料は、ロンドンの大英図書館にのみ所蔵されている貴重書である。そのスケッチの数は大型スケッチ本4冊に保存されており、点数が非常に多い。電子化が進んでいる大英図書館では、現在そのごく一部がホームページで確認ができるようになったが、全貌は未公開である。そこで、本発表では本史料の基礎的な整理、内容の紹介、そして今後の英中交流史研究への寄与の可能性について論じたい。

直観的な都合の良い解釈から生まれた文学 —ホーリー・ソーン文学の登場人物たち

笠原 慎一朗（昭和女子大学）

19世紀アメリカの作家、Nathaniel Hawthorne（1804-64）のいくつかの作品の登場人物には、「直感」や「都合の良い解釈」により行動することで物語の進展に影響を与えるケースがある。“The House of the Seven Gables”（1851）に登場する Phoebe は、現実的な判断力と生活力を備えつつ、直感もうまく働かせる人物である。彼女の直感力や解釈が誤る場面もあるが、物語全体としては成功へつながる行動を導く。一方、Hepzibah のように現実世界への適応力が低く、思い込みに基づく誤った言動をとる人物も書かれる。しかし、彼女の直感は結果的に良い方向へ働く。Hepzibah が生活のために店を開く行為や、Phoebe や Holgrave を家に迎え入れる決断は深い計算によるものではなく直感的であるが、それらは最終的に Pyncheon 家にまつわる家系の呪いを解くきっかけとなる。“The Scarlet Letter”（1850）の Hester も、直感と都合の良い解釈を併せ持つ人物として描かれる。彼女は街の人々が噂するように夫 Chillingworth がすでに死んだものと都合よく解釈したように思われる。夫に対して愛情を持てなかつたこともあり、そのことが、夫はすでに亡くなっているという都合の良い解釈につながり、Dimmesdale と姦通の罪を犯す一つのきっかけになったのではないか。しかし、罪を負った後、Chillingworth が生きていることを知った後も彼女は、決して悲観していないように見える。Dimmesdale が Chillingworth の精神的な迫害を受けていることを知つて心を痛めた時も前向きに物事

を考えて打開策を模索する。彼女のこのプラス思考は、Dimmesdale に多少なりとも力を与え、物語を前へ進める原動力となる。悲観的で精神的に脆い Dimmesdale は、Hester の前向きで楽観的な考えによる励ましがなければ物語のクライマックスまで精神的に耐えられなかつたと考えられる。そして最後に彼が直感に従つて公衆の面前で罪の告白をした行為は、物語の構造上の成功例として重要であり、彼自身と Pearl、そして Hester を罪の束縛から解き放つ役割を果たす。

さらに、子どもの直感力は "The Scarlet Letter" の Pearl と "The Gentle Boy" (1832) の Ilbrahim において対照的に描かれている。Pearl は、危険を本能的に察知し自らを守る直感力を示す。しかし、Ilbrahim は状況を都合よく解釈してしまうことで、直感では近寄つてはいけない危険な人物であると察知しながらも、判断を誤り、悲劇的な結果を招いているように思われる。

Hawthorne は、登場人物の直感と都合の良い解釈の成功と失敗を綿密に描き分け、それらを物語の構造の推進力として活用しているという観点で考察を行う。

ワシーリー・エロシェンコの活動

野田 晃生

ロシア出身の全盲の詩人ワシーリー・エロシェンコは、日本語をマスターして、日本において活動した。彼は、日本その他に、母国であるロシア（ソ連）、中国、イギリス、インドなどにおいて活動した。エロシェンコの活動は、一つの国枠にとどまることなく、世界中に広まった。彼の業績を検討するためには、彼の文学作品に加えて、教育的な業績、福祉的な業績についても検討する必要があるだろう。また、エロシェンコは、自分が視覚障害者であったことからも、自らが視覚障がい教育を受けた他、世界各地において視覚障がい学校の教員としても勤めた。そのため、エロシェンコは視覚障がい教育と深く結びつきがある人物であると言える。それは、世界各国の視覚障がい教育における彼の業績から見ることができる。本研究においては、エロシェンコの生涯と教育についての研究をすることによって、当時のエロシェンコの生涯と教育との結びつき、そして、それが今日までどのように続いているのか、についての検討を行いたい。彼は、日本において活動した後、社会主义者であるという嫌疑をかけられ、日本国外に追放された。彼は、その後、中国に渡り、北京大学においてエスペラント語の教師として勤務した。エロシェンコは、中国の後、母国であるソ連に戻った。彼は、ソ連において、大学の教員として勤務すると同時に、日本から来た人物達の通訳として働いた。彼は、世界各国の教育に関わった。彼の世界各国における活動は、今日においても研究される必要がある。

茶道における「わび」概念の語義史的研究 —『万葉集』から『山上宗二記』に至る語義転換の実証的検証—

中園 大樹（慶應義塾大学大学院後期博士課程）

本研究は、茶道文化における「わび」概念の語義史的転換を、『日本国語大辞典第二版』の語義区分という客観的基準に基づき実証的に検証するものである。従来の研究では「わび」概念の変遷が印象的・文学的に論じられてきたが、辞書学的基準による厳密な語義判定は行われていなかった。

本研究では『万葉集』『徒然草』『山上宗二記』の3文献を分析対象とし、各用例の語義区分を判定した。その結果、『万葉集』および『徒然草』における「わび」系語彙はすべて語義①（感情表現）に該当し、名詞「わび」の用例が存在しないことを確認した。特に『徒然草』については、菅原氏（1975年）が報告した7例を底本に基づき再検証し、実際には5例であることを明らかにした。

これに対し『山上宗二記』(1588-90年)では「侘びを立つる数寄者」という用例により、名詞「わび」が語義③(美的理念)として確立されていることを実証した。この転換のメカニズムは、『万葉集』の「侘びぞしにける」(受動的・完了)から『山上宗二記』の「侘びを立つる」(能動的・追求対象)への文法構造の変化として説明できる。

さらに武者小路千家への聞き取り調査により、現代茶道における「わび」の理解が「消極的/積極的」の二面性を持つことが示された。これは語義①から語義③への転換を現代茶道家が自覚的に継承していることを示唆する。本研究は、「わび」概念の語義転換を辞書学的基準により初めて実証的に検証した点に独自の貢献がある。

312 教室

日本密教における非情成仏構想 —五大院安然の草木成仏論を中心に—

森下 一成 (東京未来大学)

本報告の目的は、五大院安然(1005—1087)における草木成仏論を手がかりとして、真言密教における非情成仏構想の特質を明らかにする点にある。従来、「草木国土悉皆成仏」をめぐる非情成仏論は、華厳・中国天台・日本天台における仏性理解、および日本の自然観の形成との関連から論じられてきたが、真言密教、とりわけ安然教学における非情成仏の再編成についての検討は(特に現代社会の諸課題を遠望するようなそれは)、十分に加えられてこなかったようである。

まず本報告は、中国華厳宗・天台宗から日本天台宗に至る非情成仏論の前提的枠組みを簡略に整理する。その上で五大院安然が、真言密教の六大・三密・声字実相義に依拠しつつ、華厳・天台非情成仏性論を再編した点に触れ、安然の草木成仏論が、①『胎藏金剛菩提心義略問答抄』に代表される草木自發心修行成仏の側面と、②『真言宗教時義』に象徴される法身説法・依報成仏の側面という二重構造をもつことを明らかにする。この二重構造は、華厳の依報成仏および湛然的理仏性論を前提としつつ、六大・三密遍満という真言密教的宇宙論のもとで、国土全体を法身説法の場として把握し直す試みとして理解されるべきである。

結論として本報告は、五大院安然の草木成仏論を、華厳・天台非情成仏性論と真言密教即身成仏義との間を媒介する理論的結節点として位置づける。その際、草木自發心修行成仏と法身説法・依報成仏という二重構造に注目することにより、いわゆる日本仏教的自然観の形成において、非情成仏思想が果たした役割をより精緻に捉えうることを示したい。あわせて、この構図が、国土・自然のみならず、広義の「生き物」一般——たとえば動物存在や現代の環境倫理——へと応用しうる潜在的な射程をもつことを、今後の課題として示唆する。

SDGs における語彙習得とデータ分析に関する一考察

高橋 強（東海大学湘南校舎）

今回の口頭発表は、日本大学生物資源科学部の獣医学科での取り組みについて発表致します。発表者は、非常勤講師として教鞭を執って以来、一貫して教えている SDGs に関する自然科学分野における SDGs の様々な開発目標に関して、難解な語彙や表現を分かり易くパラフレーズして教えることにより、学生の語彙習得がどの程度達成できたのかをクラスター分析や 5 件法、さらにはクロンバッックの α 検定等により分析し、さらにはデータ化し、可視化することで達成度を分析したものである。また今回の発表では語用論的な観点から機能的知識と社会言語学的知識との両面に関して語用論的考察を加えたものである。また発表者が授業で使用している教材に関する語用論的記述を例として取り上げ、パラフレーズする際に必要である Focus-on-Forms と Focus-on-Meaning についても考察し発表することである。

今回の調査では質問項目として 12 項目の質問を、発表者が教えている獣医学科の学生に質問し、回答してもらったアンケート結果を収集することにより、より明確にパラフレーズして語彙習得を習得したほうが容易なのか、またはパラフレーズをすることなしに語彙を習得したほうが容易なのかについてデータを基に発表する予定である。今回の調査で明らかとなつたことは、発表者による仮説と学生からの回答とのある程度の乖離が見られたことである。当然ながら発表者は、パラフレーズして難解な自然科学英語表現を取得したほうが容易であろうという仮説を立てたが、実際にデータを取ってみると学生にとっては必ずしもこの限りではないということが判明したのである。これに関しての理論的証拠づけと実践的実用的な語彙習得に関する相違がみられたのである。これはメタ語用論としての認識の違いから生じたものである。つまり話し言葉による断片性と書き言葉による統合性の違いが浮き彫りとなつたのである。今回の発表では、上記したことに関して詳細なデータ分析を行い、分析結果を考察し、ある一定の結論を導き出すことができたことは、今後の理系英語や自然科学英語習得に微力ながら貢献できたのではないかと思っている。

韓国の社会的企業から考える日本の社会的企業

姜 英淑（東洋大学）

社会の脆弱階層のための社会的サービスや雇用サービス、地域の生活の質を高めるという目的で行われている社会的企業が注目されている。日韓における社会的企業を比較して社会的企業の社会における役割を考える。日本では社会的企業が NPO や NGO、または企業の社会的責任に変わって役割を果たしているが、韓国では社会的企業振興院等の公式的な国のサポートのなかで起業をする社会的企業がほとんどである。発表では、韓国の社会的企業の現状と成功した社会的企業の例からみえる社会的企業の役割や課題について考察し、日本における社会的企業の現状と比較する。これらの比較・課題などから社会的企業をどのように活性化または改善点は何かを考える。例に、社会的企業の中で成功したと言われている社会的企業の例をあげ、社会的企業が現社会における役割を測り、社会的企業が社会にどのような位置付けとなるかを考察する。

カンボジアにおける海外研修の実践報告 —多面的フィールドワークによる教育的効果—

郭 潔蓉（東京未来大学）・森下 一成（東京未来大学）

本発表では、2025年夏期に実施したカンボジア海外研修の実践報告を行う。本研修は、教員が学生10名を引率し、プノンペン、コンポントム、シェムリアップの3都市を陸路で巡り、日系企業の活動、歴史文化、生活文化、文化遺産について多面的に理解することを目的として企画された。現地で事業を展開する日系企業、支援活動を行うNPO法人、地域住民など多様なステークホルダーとの直接対話を通じて、実践的学びと学術的洞察を往還する学習機会を設計した。

プノンペンでは、日系企業2社を訪問し、現地で事業を行う利点や課題について講話を受け、国際経営の実態を理解した。また、カンボジアの歴史を学ぶため、ポルポト政権期の歴史遺産に関する遺跡群を巡り、歴史認識の深化を図った。シェムリアップでは、支援活動を行うNPO法人を訪問し、地域における経済支援・教育支援の実践について学んだ。特に、農村地域の住民家屋を訪問して生活文化を聞き取り、女性を対象とした経済支援プログラムの視察を通して、地方部が抱える社会的課題を認識した。

さらに、コンポントムおよびシェムリアップにおいては、アンコール遺跡群をはじめとする世界遺産を巡り、文化資源の保全と観光産業の関係について学んだ。また、シェムリアップ州北西部のトンレサップ湖における水上生活者の暮らしを視察し、自然環境と生活様式が密接に関係する地域の文化的特徴を多角的に理解することを試みた。

研修後の学生の振り返りからは、異文化理解能力の向上、国際協力や開発支援への関心の深化、異なる文化・価値・習慣を尊重する姿勢の獲得など、顕著な教育的効果が確認された。本発表では、これらの成果と同時に、プログラム運営上の課題を整理し、カンボジアを対象とした多面的フィールドワーク型海外研修の教育的意義と、今後のより効果的なプログラム設計に向けた示唆を提示する。

映画『ノースマン』と『果てしなきスカーレット』： 『ハムレット』の受容・翻案の多様性とパターン

中村 友紀（関東学院大学）

William Shakespeare（以下シェイクスピア）によるHamlet（ca. 1601年）（以下『ハムレット』）は、17世紀から21世紀の今日に至るまで、それぞれの地域・時代の人々から多様に解釈されてきた。翻案という、オリジナルのテクストを、自身の解釈により変容させて再生産する創造行為は、『ハムレット』においてさかんに行われている。

最近の顕著な『ハムレット』翻案作品に、Robert Eggersが監督したThe Northman（2022年）（以下『ノースマン』）がある。この『ノースマン』の影響を強く示す細田守が制作した『果てしなきスカーレット』（2025年）もまた、顕著な特徴を見せる『ハムレット』翻案作品である。本論稿では、『果てしなきスカーレット』にみえる『ノースマン』からの影響および、この2本の翻案映画に現れたそれぞれの解釈の地域的・文化的特徴を検証する。特に興味深いのは、『ノースマン』が北欧出身の制作者がかかわったことで、近年の北欧地域発の表象文化によく見られる北欧アイデンティティのセルフ・イメージを打ち出している点である。この北欧イメージは、19世紀以降の欧米の表象文化においては、カントの言うような意味でのロマン主義的崇高と結びつくことが特徴であり、『ノースマン』全体がロマン主義的特徴を多く示す映画になっている。さらには、『果てしなきスカーレット』の興味深い点は、こうしたロマン主義的北欧イメージが断片的に再現されているものの、それが必ずしもロマン主義やいわゆる「北欧らしさ」（ボレアリズム）の意味を換骨脱退した形で、おそらく引用あるいはオマージュとして再現されている点である。

もう一つの本論稿の論点は、2作品の結末に文化的特徴が見られる点である。『ノースマン』の結末は、オリジナルの『ハムレット』には皆無の北欧的要素をもって、神話として終わる。他方、復讐の是非という倫理的テーマを打ち出す『果てしなきスカーレット』は、現代的な倫理規範を説いて終わるが、図らずもそれが17世紀のイングランド復讐劇の一つの典型的な常套と一致した表現になっている。

閉会のあいさつ (16:05~16:10)

日本比較文化学会関東支部 事務局長 長田 元 (岐阜聖徳学園大学)

〈臨時総会〉

2025年度 日本比較文化学会関東支部臨時総会・議事録

記録：長田元(岐阜聖徳学園大学)
(敬称略)

日時・場所 2025年12月20日(土) 16:14から16:42・岐阜聖徳学園大学

出席人数 15名(うち委任状3枚) ※出席人数は全員関東支部会則5.組織イ.会員に定める会員である。

(1)議長選出

長田元が議長を選出するため立候補を募ったところ、野田晃生が立候補し参加者満場一致にて同氏が議長に選出された。

(2)総会開会の辞 議長：野田晃生

野田晃生議長の総会開会の辞により、2025年度関東支部臨時総会が開会した。

(3)会則の改正 長田元

実態のない賛助会員の会員区分の廃止及び支部会費の支払期日(5月31日)の設定、2025年5月17日に開催された第47回日本比較文化学会全国大会・2025年度国際学術大会総会にて承認された「クレジットカードによる会員・会費システム」に対応するため会則を改定したいと説明した。

また、本例会開催にあたり本学会他支部の会員と称する複数の者から「1,000円支払えば発表できるのか」という趣旨の照会を受け、支部長にも相談のうえ支部会費1,000円は発表の権利として徴収しているものではなく、会場使用料をはじめとする支部の固定的・恒常的な運営費として使用していることから従来より例会での発表は関東支部の会員に限っていると回答したことを紹介した。今回の会則改定において、例会発表できる会員を本部会員かつ関東支部に所属して支部会費を支払った会員に限ると明記することは、支部の運営と会員の権利義務との公平性を確保する観点から必要であると説明した。

説明後、参考として会費システムの画面及び出力される領収書の様式をスクリーンに表示して意見を募る時間をしばらく設け、参加者一同に承認された。委任状3枚のうち提出者2名は議長に、1名は長田元に委任していることも補足した。

(4)支部会費1,000円及び会員の権利義務について

会則の改定承認後、時間に余裕があったことから議長及び出席者の合意のもとその他連絡事項も含め協議したいことを募ったところ、議長が所属する他の学会においても会費と会員の権利義務に関する同様の問題が発生している旨の発言があった。

(5)総会閉会の辞 議長

以上、予定の議題を全て終了し、閉会した。